

■特定セッションⅢの報告

「災害時におけるソーシャルワークのあり方」

コーディネーター：笹岡眞弓（日本医療大学）

「災害時におけるソーシャルワークのあり方」と題した特定セッションは、4名の発表者を迎えて実施された。近年、世界各地で災害が頻発しており、自然災害に限らず、直近の香港での火災のように、多数の被災者が生まれ、生活再建までの道のりの長さを痛感させられる事例もある。災害の原因や発生段階を問わず、ソーシャルワークのニーズは中長期にわたり絶えず生じている。こうした状況を踏まえ、今回は抄録の中から災害支援の経験を持つ発表者に登壇を依頼した。本来であれば応募のあった11名全員の話伺い、より深い議論を行いたかったが、それが叶わなかったことは残念であった。

最初の発表では、今尾顕太郎氏が「災害支援の全フェーズで発揮されるソーシャルワークー災害緊急期ソーシャルワークの可能性ー」と題し、能登半島地震における「保健医療福祉調整本部」でのソーシャルワーク機能の不足を指摘した。特に医療ソーシャルワーカーの役割を整理し、その重要性を論じた。続いて下尾直子氏は「三宅島全島避難時における民生児童委員活動ー民生児童委員への聞き取り調査からー」を発表した。2000年9月、約6500名の避難民を支援した民生児童委員に23年後に実施したインタビューをもとに、災害時における「顔の見える支援」の重要性を明らかにした。学会が歳月を経た証言を研究することの意義を改めて確認した。

3人目の平野裕司氏は「災害被災者の生活再建におけるソーシャルワーク実践のあり方に関する研究ー災害時における被災住民の分類に基づく分析結果からー」を報告した。被災者をIV層に分類できること、その可視化の必要性を示し、とりわけIII層に分類される「被災前には支援を必要としなかったが、自力での生活再建が困難となる層」が見落とされやすいことを、東日本大震災の支援事例を通して論じた。

最後に大島隆代氏は「災害とソーシャルワークの構造的考察ー実践の価値的な立ち位置の模索ー」を発表した。システムや機能の整備だけでなく、言説空間を創り出すソーシャルワークの役割に着目し、構造的な視点からソーシャルワークの根源的なあり方を探る試みを示した。

4名の発表者による研究方法や結論をめぐって、会場では活発な議論が交わされた。災害救助法などの改正は必然であったが、その運用上の課題への対応に加え、災害時のように多職種と協働する場面で適切に活動できるソーシャルワーカーの育成という課題も残されている。今後も本学会において議論がさらに深まることを期待したい。